2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**満洲国におけるソ連・白系ロシア人の表象 －独ソ戦期の邦字新聞－**
キーワード	①白系ロシア人、②ディアスポラ、③メディア

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	スギヤマ　マオ 杉山　真央
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	名古屋外国語大学　外国語学部　講師
現在の所属先・職位等	名古屋外国語大学　外国語学部　講師
プロフィール	名古屋外国語大学講師。専門はロシア文学・ロシア語学。ロシア革命後に中国東北部のハルビンへ亡命したロシア人たちの文学と文化、なかでも詩人アルセニー・ネスメロフの研究に取り組む。コーパス言語学などことばの計量的な分析と文学研究を組み合わせ、ことばの分析から歴史と社会を読み解くことを目指している。

1. 研究の概要

本研究は、第二次世界大戦期の「満洲国」において、日本語のメディアがソ連人および白系ロシア人（ロシア革命後に祖国を離れた亡命ロシア人）をどのように描いたかを、ことばと図像の両面から分析するものである。当時の満洲国には、立場の異なる「二つのロシア」が併存し、日本人と隣り合って暮らしていた。メディアが彼らをどのように「見せて」いたかを明らかにすることは、報道が民族間の認識を形づくる仕組みを、歴史に即して解き明かす試みである。

2. 研究の動機、目的

ロシアとウクライナの間の緊張をはじめ、現代の国際的な課題を理解するうえで、歴史から得られる人文知は大きな手がかりとなる。報道におけることばの選び方や写真の見せ方は、読者が気づかないうちに、特定の人々へのイメージや価値観を形づくっていく。

多くの民族が暮らした満洲国を対象に、メディアによる「ロシア人イメージ」の形成過程を検証することで、戦時下のメディアが民族間の認識に果たした役割を明らかにし、現代のメディアリテラシーや多文化共生を考えるための手がかりを得ることを目的とする。

3. 研究の結果

当初は日刊紙『満洲日報（満洲日日新聞）』の分析を計画していたが、研究主題である「表象」を多角的に捉えるため、南満洲鉄道（満鉄）が発行した宣伝画報誌『満洲グラフ』を本年度の中心資料に位置づけ直した。同誌は 1933 年に創刊され（1935 年 4 月から月刊化）、写真と文章を組み合わせて「民族協和」の理念を内外に発信した媒体であり、文字中心の新聞とは相互補完的な関係にある。ゆまに書房刊行の復刻版により、1936 年分の全 12 号と 1940 年 1 月から 1941 年 3 月までの各号を閲覧・収集し、独ソ戦の勃発（1941 年 6 月）前後の表象を比

較するための基盤を整えた。

収集した誌面には、ロシア人を含む女性たちが笑顔で並ぶ「民族協和の国」特集、白系ロシア人の協同組合や学校生活を紹介する記事、日本人筆者がロシア人との交流を綴った随筆（「露人の店」「ハルビンの印象」など）が見られる。一方で、同じ誌面には軍歌の掲載や若い日本兵の一日を追った記事も併存しており、友好的・文化的な共生のイメージと軍事的・政治的な要素とが、一つの雑誌のなかで交錯していることが確認できた。

象徴的な事例として、1940年12月号には、日本人とロシア人の少女たちが共にスキーやそりに興じる写真が「日本娘と露西亜娘とが仲良く滑って行く」というキャプションとともに掲載されている。民族の違いが雪上の楽しい遊びの場面として描き出されるこの構図は、本研究が問う「つくられたイメージ」のあり方を端的に示している。あわせて、満洲・ハルビン研究、ディアスポラ論、メディア研究等の関連文献を購入し、今後の分析を支える基盤を整えた。





『満洲グラフ』復刻版より、ハルビンの復活祭を伝える誌面（1940 年 7 月号〔第 69 号〕）

4. 研究者としてのこれからの展望

本年度に収集した画報の分析を、当初計画していた新聞『満洲日報』の分析へと接続し、ことばと図像の両面から、戦時下メディアにおける「二つのロシア」表象の全体像を描き出すことが次の目標である。これまで、ハルビンに生きた亡命ロシア人の文学、とりわけ詩人アルセニー・ネスメロフの研究に、コーパス言語学やネットワーク可視化といったデータ分析の手法と人文学的な読解とを組み合わせて取り組んできた。本研究と並行して進めるこの一連の研究については、国内外の学術誌での論文公表を続けており、2026 年 9 月にはデジタル・ヒューマニティーズ分野の国際学会（ポーランド）での報告も予定している。

本奨励金による満洲国メディアの研究は、こうした在ハルビン・ロシア人をめぐる研究を、文学から社会とメディアの歴史へと広げる挑戦である。白系ロシア人が自ら発信した亡命ロシア語メディアと、日本側が彼らを描いた邦字メディアの双方を読み解き、同じ人々をめぐる「内からの声」と「外からのまなざし」を突き合わせる点に、この研究構想の独自性がある。今後は、人文学とデータサイエンスを橋渡しするアプローチを強みに国際的に成果を発信するとともに、大学で担当するAI・データリテラシー教育にも研究の知見を還元していく。歴史のなかの小さな声を現代に伝え、ことばと情報への感度を次の世代に手渡せる研究者として成長していきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは貴重なご支援を賜り、心より御礼申し上げます。本奨励金により、個人では入手の難しい一次資料の復刻版や関連文献を揃え、研究の土台を築くことができました。若手研究者にとって、研究の初期段階を支えていただけることは何よりの励みです。

約80年前の満洲国に生きた人々の記録を読み直す本研究は、情報があふれる現代においてメディアとどう向き合うかを考えるための歴史的な手がかりを提供するものです。いただいたご支援を糧に、研究の成果を社会へ還元できるよう努めてまいります。